

11	海部	津島市立東小学校	ワタナベ カナ 名前 渡 邊 可 奈
分科会番号	20	分科会名	総合学習

研究題目 未来を切り拓き、よりよい社会を創造することのできる児童の育成をめざして
～ 東っ子フェス 2024 の実践を通して ～

研究要項

1 研究のねらい

本校では、4年間「未来を切り拓き、よりよい社会を創造することのできる児童の育成をめざして」をテーマとして、1～2年生は生活科、3～6年生は総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。

1年目は、SDGsを中心に日本や世界の現状と抱える課題について「知る」、2年目は、課題が自分たちの生活に大きく関わっていることや、そのための解決策について「気付く・考える」、3年目は、考えたことに実際に取り組んでいく「行動する」の各ステップに重点をおいた実践を行った。それを踏まえて、4年目は、「知る」から「行動する」に至るまでの学習の流れを明確にし、学校全体で共通理解を図りながら実践を進めてきた。

これまでの実践において、参加型学習法が定着してきたことにより、考えを共有したり、様々な意見を取り入れたりしながら自ら解決しようとする意欲を高めることができた。また、課題を自分ごととして捉えながら解決方法を探ったり、考えたことを実際に行動に移そうしたりする態度を養うことができた。しかし、行動のステップにおいては、解決策や自分のできることを児童同士で交流したり、発表し合ったりすることにとどまるが多かった。児童の力だけで実行できることには限りがあるため、外部と連携して、企画やプレゼンテーションを行う必要があるという課題が残った。

そこで研究5年目となる今年度は、これまでの学習の流れを継続しつつ、行動のステップをさらに発展させた実践を進めていきたいと考える。そのためには、児童が課題の解決方法を自ら選択し、行動していくことができるような学習の場を設定していく必要がある。学校内のみならず地域の方や外部講師の方々との交流を通して、児童が課題の解決に向けての具体的なイメージをつかめるようにしていく。

行動の実践においては、各学年の中だけで終わるのではなく、「東っ子フェス 2024」と題し、学年の枠を越えての学び合いや保護者に向けた体験的なプレゼンテーションを行うことを目標に定め、学校全体で研究を進める。こうした探究的な学びを通して、自己の役割に気付き、よりよい社会を創造していこうとする児童の育成をめざしていく。

2 研究の仮説と方法

(1) 研究仮説

めざす児童像を次のように掲げ、研究のねらいをもとに研究仮説を設定した。

【めざす児童像】

自ら課題を発見し、解決策を選択し、実際に行動に移すことのできる児童



(仮説1) 【課題発見→解決策の選択→行動と実践】のサイクルを意識した探究的な実践を展開することで自己決定する力、それをもとに行動する力を育むことができるだろう。

(仮説2) 多面的・多角的な考え方を学ぶことで、よりよい解決策を探究する意欲を高めることができるだろう。

(2) 研究の方法

① 仮説1に対する手立て

ア 振り返り活動を通して、自分の成長を可視化する。

イ 児童主体の体験会を開催することを目標に定めることで、単元設定に見通しをもたせる。

② 仮説2に対する手立て

ア 外部講師の講演や助言から、多面的・多角的な考え方を学ばせ、解決策を考えさせる。

3 昨年度9月以降の研究実践

(1) 4年生の実践「アップサイクル de エコアクション」

昨年度の4年生は、環境をテーマに掲げ、環境に関係する様々な問題を取り上げ、実践を行った。夏休みまでは、海洋プラスチックの問題、食品ロスの問題、ポイ捨てや放置ごみの問題などの影響や原因・それに対して自分たちが行動できることについて参加型学習法を用いて学習してきた。それを踏まえて秋以降は、ごみ問題に焦点を当て、自分たちができることの中からアップサイクルに力を入れて活動を進めることにした。

まずは、図画工作科「ひみつのすみか」の単元に向けて、夏休み中に空き箱、アイス棒、木の实、貝殻など使いそうな物を集めた。これにより、夏休み中も「使いそうなものを見つけたら捨てずにとっておこう」と環境に配慮して生活することができた。授業では、集めた廃材を使って個性豊かに「ひみつのすみか」を作り上げることができた【写真1】。普段は捨ててしまっている物も自分たちの力でこんなに素敵な作品に生まれ変わらせることができることに気づき、アップサイクルに対する意欲がより高まった様子であった。

12月には、海洋ゴミを使って楽器を作り、全国各地で演奏会やコンサートをしている、「海洋ゴミ楽器楽団ゴミンゾク」さんをお招きして、出前授業を行った。ゴミンゾクさんには、海洋ゴミの現状や海洋ゴミを使った楽器の作り方を話していただいた。海洋ゴミ楽器の演奏では、児童にも聞き馴染みのある曲もあり、楽しみながら鑑賞することができた【写真2】。「楽器を作るコツとか、ゴミンゾクさんの海洋ゴミへの思いが知れて本当によかった」「少しでもプラスチックやごみを減らして自然環境を守りたいと思った」「ゴミでこんなにきれいな音が出るなんてすごいと思った。私も楽器を作りたい」などの振り返りから、環境問題への意識や楽器作りへの意欲の高まりが感じられた。そこで、冬休み中に楽器作りのための廃材を集め、1月から「アップサイクル東っ子交響楽団」として、楽器作りを始めることにした。楽器作りでは、打楽器に加えて、ペットボトルで音階を奏でる楽器にも挑戦した。お互いにアドバイスをし合いながら、いろいろな音色の楽器を作ることができた【写真3】。演奏の練習は、総合的な学習の時間だけでなく音楽の授業時間にも行い、教科横断的に学習を進めていった。

2月には、JICA中部国際交流事業として来日した外国人の研修生13名に向けて、「アップサイクル東っ子交響楽団」の演奏会を開催した。演奏後には、自分たちで作った楽器を渡し、演奏方法をレクチャーして一緒に演奏をしたり【写真4】、運動会で踊ったソーラン節を披露したりした。振り返りでは、「言葉や文化がちがっても音楽で気持ちが伝えられてすごいと感じた」「楽しんでもらえるか不安だったが、研修生さんが笑顔でよかったなと思った」などの意見があった。音楽を通して、言語の壁を越えたコミュニケーションの可能性に気付くことができた。また、授業参観では、1年間の総合的な学習のまとめ発表と演奏会を行った【写真5】。演奏後には、保護者の方にも楽器を渡して、一緒に演奏をしていただいた。1年間で学んできたことを伝えるだけでなく、一緒に楽しんでもらうことができ、これまで継続して取り組んできた活動への達成感を感じることができた。

1年間の総合的な学習の振り返りでは、学習の中で成長したところについて考えさせた。児童によって、関心をもった学習内容はそれぞれ異なるものの、この1年間の挑戦をJICA中部の研



【写真1 ひみつのすみかを制作】



【写真2 演奏を聞いている様子】



【写真3 楽器作りの様子】



【写真4 外国人研修生と一緒に演奏】



【写真5 学習のまとめ発表会】

修生や保護者に向けて発表し、体験してもらう機会を作ることができたことに満足しているようだった。このように、参加型学習法を取り入れた実践を継続的に行ったことで、児童の探究心を高めることができたことは大きな成果であった。

4 今年度7月までの研究実践

(1) 3年生の実践「津島の未来を守ろう」

3年生では社会科の学習が始まり、自分たちが住む津島市の施設や産業についての学習を進めている。また、総合的な学習の時間は「津島の未来を守ろう」をテーマにし、津島市が魅力ある町であり続けるための課題とその解決法や、安心安全な町づくりをするための手立てについて、SDGsのゴール11「住み続けられるまちづくりを」と関連付けながら、津島市の将来について自分事として考えられるような実践に取り組んでいくことにした。

まずは、社会科の学習で町探検を行った。ガイドボランティアの方に協力していただき、津島市観光交流センターや堀田家住宅、古い町並みをグループごとに見学した。津島神社では、拝殿や楼門を見学したり、お祭りに使われる車楽船（だんじりふね）や巻藁船の説明をしていただいたりした。「300年前や500年前の木があるのがすごい」と古くから大切に守られてきているものがあることに驚いている児童の様子が見られた。堀田家住宅では、しのび返しやうだつなど、昔の住居に施された工夫をボランティアの方に教えていただいた【写真6】。振り返りでは、「堀田家住宅には今にはないものがたくさんあった」「いろいろな対策がしてあることがすごかった」などの意見があった。実際に見たり聞いたりすることで、より具体的に昔の様子を知り、現在との違いを考えることができた。



【写真6 町探検の様子】



【写真7 温暖化教室の様子】



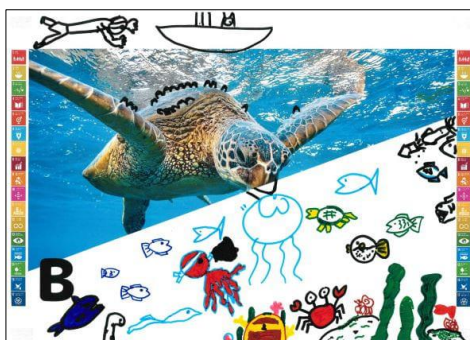
【写真8 すごろくで環境学習】

次に、「津島市の未来を守ること＝地球の未来を守ること」であると考え、地球の危機的状況を理解するために、出前授業「ストップ温暖化教室」を行った。講師の先生から温暖化についての話を聞いたり【写真7】、「ストップおんだんか☆すごろく」で体験的に学んだりした【写真8】。平均気温が上昇したり、ゲリラ豪雨や洪水が頻発したりするなど、現在進行形で地球に影響が及んでいることを知り、決して他人事ではないと実感することができた。地球温暖化について知った児童は、「温暖化を止めたい」という思いを実際に行動に移すために、自分にできることをそれぞれが考えることにした。家でできることを児童が考えたところ、「冷蔵庫を開けたらすぐに閉める」「エアコンをつけるときは、みんな一緒の部屋で過ごす」「近くに行くときは、自転車に乗るか歩く」「電気はこまめに消す」などの意見が挙がった。この思いを夏休みに実行に移して、家庭で実践することとした。

(2) 4年生の実践「環境 ～わたしたちにできること～」

4年生の総合的な学習の時間では、環境をテーマに学習を進めることにした。初めに、海洋プラスチック問題、食品ロス問題、ごみ問題などの問題提起を行うために、7種類の写真を用いてフォトランゲージを行った。フォトランゲージでは、写真の一部分に何が隠されているのかを予想して、イラストや言葉で表現した【資料1】。その後、隠れている部分を紹介すると、予想したものとは違っていたことに驚く様子が見られた。

次に、フォトランゲージで見た写真の現状がこのまま続くと、どのような未来になってしまうのかを派生図を用いて考えた【資料2】。完成した派生図はギャラリー方式で共有し、「こうなってほしくない」と思うものに、1つずつドクロマークをつけて回っ



【資料1 イラストを描いた写真】



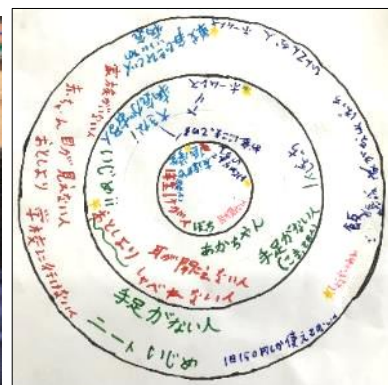
【資料2 派生図】

(3) 5年生の実践「だれ一人取り残さない」

これまでSDGsについて学んできた児童は、17の目標や世界の現状、課題についての興味関心が高い。そこで、2030年までに目標を達成するためにはどうしたらいいのか調べていくと、「弱い立場の人」に目を向けていくことが大切だということが分かった。そこで、「弱い立場の人」とはどんな人たちのことなのかを考えさせた。自分たちの身近な人、日本、世界という三つの視点で考えさせ、グループでブレインストーミングを行った【写真11・資料5】。その後、ギャラリー方式でそれぞれのグループの意見を共有したり、星マークをつけて考えを認め合ったりして、「弱い立場の人」のイメージを広げた。

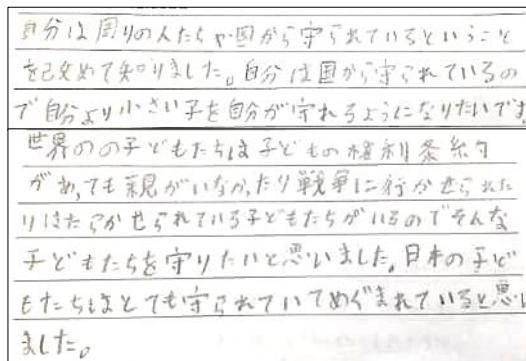


【写真11 話し合いの様子】



【資料5 弱い立場の人とは】

その中で、自分たち「子ども」は、大人に比べて弱い立場、守られる立場であることに気付いた。そこで、子どもを守る仕組みがあることを伝え「子どもの権利条約」について調べ学習を行った。40条ある条約を調べながら、自分事として振り返ったり、世界の子どもたちについて考えたりして、「自分たちはとても守られているんだ」と感じる一方で「世界の子どもたちの中には、当たり前のことが守られていない子どもたちがたくさんいる」という感想をもった児童が多かった【資料6】。



【資料6 児童の感想】

児童は、様々な立場の人の権利を守る仕組みがあることを知り、他の弱い立場の人についてもっと知りたいという気持ちをもつことができた。そこで、今後は、様々な弱い立場の人たちの現状や課題、守る仕組みについて調べたり、実際に様々な立場の人と交流する機会を設けたりして、理解を深めていきたい。さらに、自分たちにできることについて考え、できることを実践していこうという気持ちを高めたいと考えている。

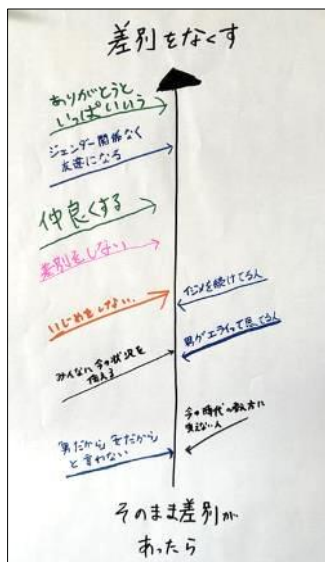
(4) 6年生の実践「世界中に住む人々から隣の席の友人にまで」

6年生の総合的な学習の時間では、「多文化共生」を大きなテーマとして学習を進めている。昨年度の5年生の総合的な学習の時間では、多文化共生の第一歩となる「コミュニケーション」の大切さについて人権という視点から学んできた。それと同時に「幸せ」をテーマに、人の幸せには物質的な幸せだけではなく、精神的な幸せも大きく関わっていることについても気付くことができた。また、今年度は児童会活動でも世界の国のあいさつでコミュニケーションを図る活動も行っており、国際理解についても考える機会を設けている。



【資料7 フォトランゲージの写真】

今年パリ五輪の開催年であり、スポーツへの関心が高まっていることから、スポーツを通して世界の現状を知るためにフォトランゲージを行った【資料7】。ジェンダー差別や世界平和、貧困、児童労働などの諸問題を考えることができるよう6枚の写真を用意し、そこからどんな問題が考えられるのかを話し合い、世界の様々な現状を知ることができた。また、それぞれの問題がこのまま続くとどうなるのかを「派生図」を用いてまとめた。さらに「力の分析」を行い、課題解決や目標達成をはばむもの、課題解決に役立つことや有効に働く力を書き出した【資料8】。スポーツを通して世界の現状を知り、それぞれの課題に気付き、課題解決のために必要なことは何なのかを考えることで、子どもたちが今後自分で進んでいく道を考えるきっかけになった。夏休み明けからは、自分が強く関心をもったことに焦点を当てて、それぞれが学習を進めていく予定である。



【資料8 力の分析】

次に、多文化共生についての出前授業を2回行った。1回目は『スポーツ×SDGs「Games wide open!花ひらけ。夢ひらけ。』と題し、スコットランド在住のラグビースコットランドリーグで活躍する忽那健太さんとアフガニスタン出身の空手大好きサダットさんをお招きした。サダットさんには、アフガニスタンの紹介と来日したねらいについて講話をしていただき、サダットさんが大好きな空手の披露と正拳突きを体験させていただいた【写真12】。忽那さんには、イギリス・スコットランドの街並み、暮らしや文化について紹介していただいた。また、自身の経験をもとに夢を追い続けることのすばらしさ、夢の叶え方をテーマに講話をしていただいた。さらに、ラグビーの体験もさせていただいた。この出前授業を通して、児童は「アフガニスタンとイギリスの文化や暮らしについて知ることができてよかった。日本との違いがあるのは当たり前、そこをどれだけ分かってあげられるかが大切だと思った」「サダットさんが日本文化の空手を好きでやってくれたのはうれしかった」と自分たちが多文化について知ること、他国の人に日本の文化を知ってもらえることに喜びを感じていた。



【写真12 サダットさんの講話】

2回目は、JICA 中部の教師海外研修でネパールに研修に行った本校の職員による「NEPAL×JAPAN 多文化共生の街づくりへの第一歩!」を行った。外国人との文化交流を通して異文化の面白さに気づき、多文化共生社会の実現に向けてできることを考え、外国人の視点で日本の文化を振り返り、外国人にとってやさしい街づくりを目指すためのアイデアを考えることをねらいとして、活動を行った。ネパールクイズでは、異文化の面白さについて楽しく学ぶことができた【写真13】。あいさつゲームでは、マジョリティとマイノリティの立場について理解し、異文化への理解を深めることができた。「バーンガ」というゲームでは、自分のルールが通用しない状況を体感する中で異文化を理解しようとする心情を養うことができた。振り返りでは「日本語が分からず、日本にいる外国人はととても心細いと感じていることに気がついた。また、日本のルールが元の国のルールと違うから戸惑ってしまうことも分かった。これからはそんな気持ちにも寄り添ってあげたい」「私たちの目線から見ると外国人を仲間外れにしていらないと思っけていても、外国人からするとさみしかったり悲しかったりするシーンがあるのかなと思った。これからはそこも踏まえて考えていきたい」と多文化共生にとっても前向きな意見が多くあった【資料9】。



【写真13 ネパールクイズ】

日本と外国にはたくさんちがう点があるのだと改めて感じました。ただ日本とちがうから仲間外れにしたりするのはなく、その文化やその国のことを理解して助け合うことが大事だと思いました。
今回の授業を生かして外国の方が来たときに自分たちが相手を理解して助けようと思いました。

【資料9 児童の感想】

昨年度からここまでに、多文化共生を理解する上で大切な、「コミュニケーションについて」「幸せとは何か」「マジョリティとマイノリティ」について学んできた。まだまだ、これから世界中に住む人々から隣の席の友人にまで想像力を働かせていかなければならない。日本や世界の様々な課題解決に向けて、それぞれができることをしっかりと考えて、今年度のテーマの一つでもあるスポーツを通して多文化共生を実現するために、自分たちでアクションを起こしていく予定である。

5 成果と課題

(1) 成果

- 参加型学習法を取り入れ、多様な意見を出し合うことで、児童が自ら課題を発見し、新たな解決策について考えることができた。そして、その考えの中から自分たちにできることを選択し、その後の活動に生かすことができた。
- 「東っ子フェス 2024」という目標を設定したことで、自分たちが経験したことを周りの人に発信するまでの学習の流れがイメージしやすくなり、活動への積極的な参加につながった。
- 外部講師の講演や助言により、課題解決に向けた知識を増やしたり、新しい見方や考え方に気付いたりして、よりよい解決策を探求しようとする意欲を高めることができた。

(2) 課題

- 児童の変容を捉えやすくしたり、児童が自分の成長を実感し、今後の活動に生かしたりするために、振り返り活動の方法やタイミングを精選する必要がある。